Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-04-30

見田宗介における社会構想の社会学――人間の可能性の理論

徳宮，俊貴

(Degree)
博士（文学）
(Date of Degree)
2023-03-25
(Date of Publication)
2026-03-25
(Resource Type)
doctoral thesis
(Report Number)
甲第8524号
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100482272

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

論　文　内　容　の　要　旨

論 文 題 目　　（外国語の場合は、その和訳を併記すること。）

見田宗介における社会構想の社会学――人間の可能性の理論

氏　　名　：　徳 宮 俊 貴

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程社会動態専攻

指導教員氏名　（主）白 鳥 義 彦　教授

（副）平 井 晶 子　教授

（副）安 倍 里 美　講師

（注）４，０００字程度（日本語による）。必ずページを付けること。

本研究は，「社会構想の社会学」の可能性を探求するための基盤となる理論枠組み（theoretical framework）の獲得をめざして，見田宗介（1937-2022）の理論と思想の内在的読解をふまえた発展的再構成を試みるものである。

序章「社会構想の社会学と見田宗介の人間解放論」では，はじめに社会構想とはなにか，社会学は社会構想にどう関与できる（と考えられている）かが確認され，つづけて見田の人間解放論の構成，ならびに社会構想の社会学に対する見田の射程と限界が検討される。社会構想の社会学とは社会思想・哲学と社会（科）学のインターフェイスをにないうる理論分野であり，その主題は（1）一人一人の生きられる困難をその時代その社会の構造的な問題として巨視的に把握しなおすとともに，（2）人間存在の原論的な考察をつうじて望ましい社会の（自己批判に開かれた）原理的なイメージを提示し，問題の克服に展望や方向性を与えることで，（3）主体的な変革実践を連鎖的に触発することである。見田の人間解放論は，（1）現代化日本（高度成長期）における倦怠感と虚脱感のリアルタイムの観測から出発し，それを近代社会の存立構造にまでつきつめニヒリズムの問題としてとらえ返したうえで，（2）コンサマトリーと交響という独自の概念によって近代をのりこえる人間観を提示し，全体社会のもっとも単純化されたモデルとして交響圏とルール圏を構想しただけでなく，（3）その理論を真木悠介という文体でつづることでもって読者たちの触発を試みた点において，社会構想の社会学の先駆をなす。

第1章「見田の理論と思想をどう読むか」では，見田の著作にもぐりこむ事前準備として，それらがどう読まれ，論じられてきたかが概観されたうえで，本稿における読解の視角が設定される。直接あるいは間接に見田の影響をうけた著作は無数に存在するが，見田の理論や思想そのものを主題化した研究は着手されたばかりで，管見のかぎり蓄積がほとんどない。イメージ先行で論拠にとぼしい解釈が横行し，曲解や俗論や悪用をふりおとす一定の基準さえ存在していないのが現状である。見田の所説をめぐる学術的に建設的な討論の場を整備するためには，イメージ（のみ）にたよった我流の解釈をみだりにうちあうのでなく，概念の内実を見田の論述に内在しつつ精緻化または再構成し，一定の共通理解を形成したうえで批判的にのりこえてゆくという，腰をすえた地道な読解作業こそがまず必要だろう。見田の独創的な概念や理論や思想に対して，その内実と可能性の中心とを把捉し再構成するうえでは，一書ごとの字面や背景に過敏にこだわるより，むしろ行間・著作間をこえたメタ的ないし体質的な思考の地下水脈にまでかぎりなく肉薄し，理解の母型を獲得したのち，ひるがえって個々の所説の布置を系統だててゆくような，そういう作業こそが求められる。

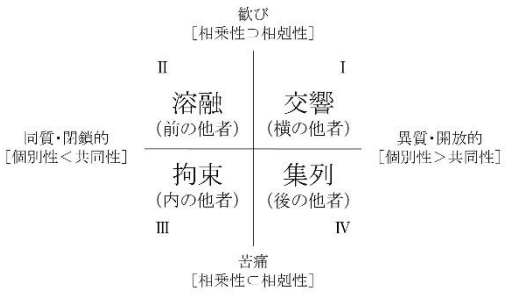
第2章「豊かな社会の倦怠と虚脱」では，見田の初発の問題意識がふりかえられ，若き見田が，高度成長期日本（「夢の時代」）の大都市部（ゆたかな社会）にすくう倦怠感と虚脱感のリアルタイムでの観測から出発したこと，この作業が見田の思索の堅固な土台を形成し，後年の人類史規模の社会認識＝社会構想にいたるまで着想の源泉でありつづけていることが指摘される。

第3章「ニヒリズムの存立構造――集列性・交換価値・手段主義」では，現代社会の虚脱感を近代の不可避の帰結であるニヒリズムの問題として追究した見田の存立構造論が読解され，この根本問題を見田がどんな方向へのりこえようとしたかが跡づけられる。集列性とよばれる関係態を原基とする社会では，貨幣や時間に象徴されるように質的な多様性・多元性を抽象された数の物神化が生じて，世界が可算化され可換化されるにつれ人々の関心は空洞化し遠隔化し，現在の意味をよりとおい未来の成果に求める手段主義におちいるわけだが，このとき未来にある死によって現在のすべてが無意味化・空虚化してしまう。見田はニヒリズムの乗りこえを，個々の事物の質的な具体性・固有性（かけがえのなさ）を感受する能力の再建とも称すべき方向に展望していた。それを嚮導する概念こそ，「コンサマトリー」と「交響」である。

第4章「コンサマトリー概念の再構成――脱効用のエクスタシー」では，現在をたのしむといった平板な意味で理解されがちな見田のコンサマトリー概念が，もっと縦深的な，効用性を脱して「尽きなく存在すること」への衝迫という含意をおびていることが考証されたのち，当概念と解放理論＝社会構想との関係性が推察される。“consummatory”と対をなす“instrumental”がたんに未来志向を意味するだけでなく功利や効用を含意することから，ひるがえってコンサマトリーが非効用性（あるいは脱効用性）への欲求を含意すること，つまりバタイユの〈消費〉概念のもつ焼きつくすこと，燃えつきることという意味をともなうことがわかる。自己を灼きつくさんとする宮沢賢治の願望は，自己犠牲の効用性をこえて個我の外（〈世界〉）に出で立つこと（ecstasy）自体への衝迫力すなわち「裂開」の機制に由来するわけだ。コンサマトリーな現在を尽きなく存在するにあたって方向性をあたえるフィクションとして，社会構想は要請される。コンサマトリーとは，自己の生の解放と社会の未来の構想とを弁証法的に架橋する概念なのである。

第5章「交響の弁証法――他者と出会う歓び」では，見田の社会理論および社会構想の中核をなす交響概念の内実が，他者との関係をめぐる諸概念との布置とあわせて把握される。まず溶融・対・交響という構図の一貫性が確認されると同時に，相乗性＝裂開＝溶融という理路が跡づけられ，交響を相乗性とむすびつける理解がたちゆかないことが指摘される。これをうけて相剋性と交響との関連がさぐられ，相剋性の因子（他者性・異質性）との出会いこそが交響の体験であるという示唆をえたのち，相乗性の磁場による相剋性の因子の反転が吟味され，交響が相乗性か相剋性のどちらか一方ではなく，反転の動態全体を含意することが考証される。最後に見田の外化 - 内化論を経由することで，溶融の局面と自立の局面とを往還する螺旋状の位相運動として当概念が定位される。交響とは，異質な他者との出会いによって個我が裂開し存在の〈世界〉へと内化する瞬間的な様態と，これによりいっそう相互に異質化した個として社会的現実の「世界」へと外化する様態とを往還するはてなき螺旋運動から，そのつど新鮮に立ち上ってくる弁証法的な他者関係にほかならない。

第6章では，以上の知見をふまえ，見田の全体社会構想の独自性と意義と射程が，多文化



主義理論および親密圏概念との比較をとおして再検討される。「交響圏・間・ルール圏」という見田の全体社会構想は，今日の多文化主義理論におけるエンクレーブ・間・ハイブリッドという二階建ての論理と外見的には同型である。しかし，（コミュニタリアンの想定するような）規範やカテゴリーを共有し等質性によって統合される共同体（enclave）とは異なって，交響圏はむしろ彼我の異他性によってこそむすびつく関係をさしており，「かけがえのない他者との，間身体性にもとづく，離脱の自由を保障された関係」を含意する点では親密圏概念とかさなる。けれども，親密圏が私的領域に隠蔽されてきた問題を告発するとともにオルタナティブを模索するための政治性をおびた概念であるのに対し，交響圏は他者存在の歓びとしての面を分析的（理念型的）に再構成した規範概念である点で，両概念は決定的に異なる。この見地からふたたび見田の論述にたちもどると，交響圏の理論上の偶発性と潜在的開放性という読解の可能性がうかびあがる。全体社会（ルール圏）における相互承認はいかにして可能かという社会構想のアポリアに対して，見田の認識と感覚は従来の規範主義的な解決とは別様の理路を示しうる。異質な他者の存在は歓びでもあるという認識を，あえて強調することで社会理論にくみいれる余地を確保し，近代の社会科学の大前提にあるホッブズ（T. Hobbes）的な人間観＝他者感覚に修正をせまる一種の異議申し立てとして，見田の社会構想は読まれねばならない（図参照）。

第7章では，社会構想の社会学はいかなる作風（style）によって可能かという問いを背景におきつつ，その手がかりが見田の文体に求められる。思想や理論や方法論と文体とは不可分の関係にある。このことをつよく自覚していた見田は，イメージの論理によって誤読をひきうけてでも人々を触発することを選択した。また質的分析論において，柳田国男や宮沢賢治や石牟礼道子のように，個我の裂開という受動的な体験をつうじて他者の内的世界を共有することを方法としていた。科学と社会の関係が長期的な地殻変動のさなかにある今日，社会科学の文体＝方法論の多様性を模索するうえで，社会構想の社会学は，非言語的メディアふくむさまざまな作風が毀誉褒貶の渦中で試行錯誤される実験場の様相を呈することになると展望される。

終章「見田宗介から社会構想の社会学へ」では，本稿でえられた知見がまとめられたのち，見田の所説の読解から提起される社会構想の社会学の理論的諸課題として，ホネット（A. Honneth），イエッギ（R. Jaeggi），ローザ（H. Rosa），柄谷行人，熊野純彦，ウォーラースティン，ハート（M. Hardt）とネグリ（A. Negri），ポストン（M. Postone），ピケティ（T. Piketty），ハーヴェイ（D. Harvey），岩崎信彦，斎藤幸平，ブーバー（M. Buber），レヴィナス（E. Lévinas），バウマン（Z. Bauman），野口三千三，ホール（E. T. Hall），木村敏，花崎皋平，マルクーゼ（H. Marcuse），バタイユ（G. Bataille），フッサール（E. Husserl），ニーチ

ェ（F. Nietzsche），竹田青嗣，フロイト（S. Freud），ラカン（J. Lacan），作田啓一，フェミニズム，正義論，公共性論，承認論，所有論などの諸理論・学説との接続ないし展開可能性が列挙される。近代のあとにくる時代の社会学のあり方を模索するとき，見田がさし示そうとした社会構想の社会学という可能性は，たえず気づき（inspiration）をあたえてくれる一素材でありつづけるだろう。

［課程博士用］

（別紙１）

論文審査の結果の要旨

氏　　名	徳宮　俊貴
論文題目	見田宗介における社会構想の社会学　――人間の可能性の理論――

要　　旨

本論文は、「社会構想の社会学」の可能性を探求するための基盤となる理論枠組みの獲得をめざして、社会学者見田宗介（1937-2022）の理論と思想の内在的読解をふまえた発展的再構成を試みるものである。ここで社会構想とは、一人一人の生きられる困難をその時代その社会の構造的な問題として巨視的に把握しなおすとともに、人間存在の原論的な考察をつうじて望ましい社会の、自己批判に開かれた原理的なイメージを提示し、問題の克服に展望や方向性を与えることで、主体的な変革実践を連鎖的に触発すること、そして社会構想の社会学とは、社会学理論に与えられた現代社会に見出される様々な諸課題を自覚的に引き受け、社会のあり方を見直し、社会の変革の方向性を示そうとする所信表明としてとらえられる。

1960年代末、いわゆる全共闘運動への応答を直接の動機として、見田は真木悠介の筆名のもと「人間解放のための全体理論」を始動させる。この人間解放論は、「目的の理論」と「情況の理論」と「実践の理論」の3部門からなる。目的の理論は実現すべき未来についての総体的なイメージの確立を、情況の理論は現代社会における疎外の体系の透徹した総体的な認識を、そして実践の理論は疎外の体系に内奥までひたされ形成されているわれわれがどのようにして自己を解放の主体として形成しうるのかを、それぞれ考究する。そして見田は、(1) 現代化日本（高度成長期）における倦怠感と虚脱感のリアルタイムの観測から出発し、それを近代社会の存立構造にまで論理的に突き詰め、その原基としての「相剋的な集列性」およびその帰結としてのニヒリズムの問題として把握したうえで、(2)「コンサマトリー」と「交響」という独自の概念によって、近代をのりこえる人間観を提示し、(3) 全体社会のもっとも単純化されたモデルとして「交響圏とルール圏」を構想した。(4) しかもこれを真木悠介という文体で書くことをつうじて、読者を触発することを試みている。ここに、社会構想の社会学の可能性を探求するために見田の理論・思想に着目する意義が見出される。

序章「社会構想の社会学と見田宗介の人間解放論」では、社会構想とは何か、社会学は社会構想にどう関与できるかを確認したうえで、見田の人間解放論の構成、ならびに社会構想の社会学に対する見田の射程と限界が検討される。社会構想の社会学が、社会思想や社会哲学とのインターフェイスを担う領野として定位されるとともに、見田の人間解放論が社会構想の社会学の先駆をなすと位置づけられる。

第1章「見田の理論と思想をどう読むか」では、見田のテクストに潜り込む事前準備として、見田の著作がどう読まれてきたか、どう読まれるべきかを簡潔に検討し、本論文の読解のアプローチが定式化される。見田の所説をめぐる学術的に建設的な討論の場を整備するためには、概念の内実を見田の論述に内在しつつ精緻化し、一定の共通理解を形成した上で批判的に乗り越えていくという、腰を据えた地道な読解作業こそが必要となることが指摘される。

第2章「豊かな社会の倦怠と虚脱」では、見田の初発の問題意識を探求し、初期の見田が、高度成長期日本（「夢の時代」）の大都市部（ゆたかな社会）に巣くう倦怠感と虚脱感のリアルタイムでの観測から出発したこと、そしてこの作業が見田の思索の堅固な土台を形成し、後年の人類史規模の社会認識＝社会構想にいたるまで、着想の源泉であり続けていることが論じられる。見田はさらに、そうした虚脱感の根源に近代社会の構造的な問題を発見し、その論理的な帰結としてのニヒリズムを特定している。

第3章「ニヒリズムの存立構造―集列性・交換価値・手段主義」では、このニヒリズムの問題に対する見田の所

主査記載 氏名（自署）	白波瀬佐和子

論をふりかえり、彼が近代の根本問題をどこに見出したか、それをどのような方向へ乗り越えようとしたかが究明される。まず、見田が近代社会の原基として集列性という関係の原理を措定したことを確認し、次に、この集列性が貨幣と時間を物神化する機制が跡づけられる。こうして世界が可算化され可換化されるにつれて、人は現在への関心を空洞化し、人生の意味を未来に求めるようになるが、この「手段主義」こそが、未来に待つ死による現在の無意味化・空虚化、すなわちニヒリズムを帰結する。その克服を、見田は、個々の事物の質的な具体性・固有性（かけがえのなさ）を感受する能力の再建に展望していた。そのための嚮導概念こそが、コンサマトリーと交響である。

第 4 章「コンサマトリー概念の再構成―脱効用のエクスタシー」では、現在をたのしむといった平板な意味で理解されがちな見田のコンサマトリー概念が、効用性を脱して「尽きなく存在すること」への衝迫という含意を帯びていることが考証されたのち、当概念と解放理論＝社会構想との関係性が論じられる。コンサマトリーは非効用性あるいは脱効用性への欲求を含意し、バタイユの〈消費〉概念のもつ、焼きつくすこと、燃えつきることという意味をともなっている。コンサマトリーな現在を尽きなく存在するにあたって方向性をあたえるフィクションとして、社会構想は要請される。コンサマトリーとは、自己の生の解放と社会の未来の構想とを弁証法的に架橋する概念である。

第 5 章「交響の弁証法―他者と出会う歓び」では、見田の社会理論および社会構想の中核をなす交響概念の内実が、他者との関係をめぐる諸概念との布置とあわせて把握される。まず溶融・対・交響という構図の一貫性が確認されると同時に、相乗性＝裂開＝溶融という理路が跡づけられ、交響を相乗性とむすびつける理解がたちゆかないことが指摘される。その上で相剋性と交響との関連に着目し、相剋性の因子（他者性・異質性）との出会いこそが交響の体験であるという示唆を得たのち、相乗性の磁場による相剋性の因子の反転を吟味し、交響が相乗性か相剋性のどちらか一方ではなく、反転の動態全体を含意することが考証される。最後に見田の外化－内化論を経由することで、溶融の局面と自立の局面とを往還する螺旋状の位相運動として当概念が定位される。

第 6 章「ルール圏と不可視の交響―多文化主義論／親密圏論によせて」では、以上の知見をふまえ、見田の全体社会構想の独自性と意義と射程が、多文化主義理論および親密圏概念との比較を通して再検討される。全体社会（ルール圏）における相互承認はいかにして可能かという社会構想のアポリアに対して、見田の認識と感覚は従来の規範主義的な解決とは別様の理路を示しうる。異質な他者の存在は歓びで（も）あるという認識をあえて強調することで社会理論にくみいれる余地を確保し、近代の社会科学の大前提にあるホッブズ的な人間観＝他者感覚に修正をせまる一種の異議申し立てとして見田の社会構築がとらえられる。

第 7 章「真木悠介の誘惑―方法論と文体の実験」では、社会構想の社会学はいかなる作風によって可能かという問いへの手がかりが、見田の文体に求められる。思想や理論や方法論と文体とは不可分の関係にある。科学としての認識的な論証に徹しながら人々に感覚の次元でよびかけるという両立困難な要請にたえる文体こそが、人間観＝他者感覚に変容をせまる理論言説を可能にすることを見田は自覚しており、イメージの論理によって人々を触発した。

終章「見田宗介から社会構想の社会学へ」では、本論文で得られた知見と、今後の展望が述べられる。

本論文は、社会構想の社会学という大きな問題構成を土台に置きつつ、見田の議論を内在的に読み解くことによって、見田社会学の解釈ということにとどまらず、社会のあり方そのものを考えていく大きな可能性を提示している。

以上の審査結果に鑑み、本審査委員会は論文提出者徳宮俊貴が博士（文学）の学位を授与されるに値するとの結論に達した。

審査委員

区　分	職　名	氏　名（自　署）	区　分	職　名	氏　名（自　署）
主　査	教授	白鳥　義彦	副　査	講師	梅村　麦生
副　査	教授	平井　晶子	副　査	大和大学教授	油井清光
副　査	准教授	佐々木祐			